

暑熱サイエンスも早いもので第10回（最終回）を迎えました。これまで、できる限り多様な観点から運動中の暑熱ストレスについてご紹介させて頂きましたが、いかがでしたでしょうか。皆様の中の暑熱対策や熱中症に対する認識に新たな視点を提供することができたのなら幸いです。

スポーツ現場あがりの研究者である私は、現場にとって意味のある科学的根拠を追求することに常に情熱を燃やしています。実験室で行う基礎研究はもちろん重要ですが、私はそのデータを現場に応用し、実践につなげるところで昇華させるのが、専門家の役割だと思っています。

細川由梨

暑熱サイエンス



この考え方は在米中に籍を置いていた研究室のKorey Stringer Institute (KSI)の影響を大きく受けています。

KSIは、労作性熱射病によって命を落としたプロアメリカンフットボール(NFL)のリカンフットボール(NFL)の研究者としてそのギャップを埋めるために日々研究や教育に従事しています。

事故の教訓を多くの人へ伝えたい

選手のKorey Stringer氏のような事故を二度と繰り返さないことを誓い、2010年に設立されました。このKSIに所属する研究員の多くは、私のようなアスレティックトレーナーのバスケットラウンドを持つ研究者です。言い換えると、プレホス

ピタル対応の現場を知る研究者集団といった感じでしょうか。我々は科学的に明白なことが、必ずしも現場では当たり前ではないことを知っています。そのような葛藤を現場で感じた経験があるからこの研究としてそのギャップを埋めるために日々研究や教育に従事しています。

日本に帰国してからはKSIに医科学委員会のメンバーとして関わっていますが、今はKSIでの経験を日本に還元することが私の使命だと感じています。そんな背景もあった中で、帰国直後に第五管

区の方々との出会いがあったことについては初回で記した通りです。労作性熱射病に関する正しい知識を「知らない」が「助からない」につながってしまった事故は、残念ながら国内外で毎年発生しています。だからこそ事故から学んだ教訓をより多くの人に伝え、良い実践例を一つでも多く広めることが、後に安全に関わる制度や意識・慣習を変えることにつながると考えます。

この「一つ」の事例を作るのにも、実際には膨大な時間と労力が必要になります。18年から始まった第五管区での取り組みも3年目に入り、ようやく形になってきた実感があります。

海上保安官をタクティカルアスリートとしてとらえて暑熱対策を実践するという現在の取り組みは、今後国内の他機関が参考にするようなモデルケースにきつとなると思います。微力ですが、これからも現場の皆様にも「暑熱サイエンス」を通じて貢献することができれば幸いです。

（早稲田大学スポーツ科学学術院准教授）

※「暑熱サイエンス」は今回で終わりです。これまでの連載は海上保安協会のホームページにアップします。